

Title	モンゴル・日本親善協会『桜』誌編集部『日本語独習書』Iにおける記述上の問題点
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学論集. 9 p.51-p.76
Issue Date	1993-09-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79604">https://hdl.handle.net/11094/79604</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# モンゴル・日本親善協会『桜』誌編集部『日本語独習書』Ⅰに おける記述上の問題点

角 道 正 佳

Problems in the Description of *Teach Yourself Japanese* by Tomorbaatar

KAKUDO Masayoshi

## 0. はじめに

『日本語独習書』ⅠはA5版95ページの小冊子で、1991年にウランバートルで3000部出版された。新出語集リストには372語、漢字は139字が載っている。序文ではⅡ巻も出ることになっているが、1993年3月の時点ではまだ出版されていない。残念なことにⅠ巻自体書店の店頭で見かけることはほとんどない。さらに残念なことは出版元の『桜』誌編集部が紙不足のためすでに『桜』の発行を停止している。本書に関する意見は『桜』誌編集部宛に投稿すればよいのであるが、実際には活字にはならないと思われる。現在入手可能な日本語学習用の書物にバダムラクチャー・セルジャブ著『日本語』があるが、この書物は日本語の初等文法を概説したものであり、読解力や会話を身につけられるようにはできていない。『日本語独習書』のほうも文法の概説のみならず読解用のテキストがついているので、努力しだいで読解力がつくように作られているので、現在の事態が悔やまれる。

『日本語独習書』はモンゴル語で書かれた最初の日本語入門書であるという点できわめて重要な役割を果たす書物であることが期待されるが、様々な理由によって、以下に述べるような問題を含んでいる書物である。まず入門書の性質上、記述が十分でない点が多々見られる。これは本質的にやむをえない点であろうが、本書では文法上の説明が不十分であるにもかかわらず、例文にはさらに詳しい説明を要するものが挙がっているという点でことは重大である。また、入門者を意識したために、表現が不正確になっている部分がある。さらに、著者自身は正しく認識していると思えるのに、表現のまずさのために結果的には間違った記述になっているものがある。そして最後に著者自身の力不足あるいは誤解のために記述が正しくない部分がある。本校は書評が目的ではなく、こういった問題点を具体的に指摘し記述を正すのが目的である。したがって欠点ばかり目につくよう

な書き方になるが、だからといってこの書物の価値が下がるわけではない。

本書はモンゴル語で書かれているため、キリル文字が用いられている。文法項目を説明している部分は普通の漢字仮名混じり文に直しても議論上支障はないが、音声の説明をしている部分では仮名書きに直すことができない。またローマ字に置き換えてもかえって誤解を招く可能性があるので、一部キリル文字のままで引用することにする。なお本書は分かち書きの面でも問題を有しているので、実例をできるだけ多く示す目的で不自然ではあるが原文の通りの分かち書きで引用する。

## 1. 発音

まず次の記述から見ていくことにする。最後の括弧の中の数字はページを表す。

- (1) 日本語には А, И, У, Э, О という 5 母音, К, С, Т, Н, Х, М, Р という子音がある。また Ц, Ш, Ч, П という有声音がある。[ 9 ] <sup>1)</sup>

Ц, Ш, Ч, П はすべて無声音であるからこの記述は意味をなさない。Ц, Ш, Ч, П は Г, З, Д, Б の単純なミスであると考え、一応納得がいくが、Н, М, Р も有声音であるから全体としてはやはりおかしい。そもそも清音、濁音、半濁音をいう概念を有声音、無声音という概念だけで規定しようとするから、こんな変なことになるのである。濁音は有声音であるが、有声音は濁音とは限らないから、濁音を有声音で置き換えるわけにはいかない。また Ц, Ч は Т の条件異音であり、Ш は С の条件異音であるから、子音として取り上げる必要はない。П は半濁音である。拗音を補助母音 Я, Ю, Ё で表しているため、日本語には J という子音があるということが忘れられている。また В も忘れられている。結局次のように書き換えなければならない。

日本語には А, И, У, Э, О という 5 母音, К, С, Т, Н, Х, М, Р, В という清音がある。また Г, З, Д, Б という濁音および П という半濁音がある。

同じページに次のような記述がある。

- (2) また Ай, Уй, Эй, Ой という二重母音がある。[ 9 ]

Ай, Уй, Ой は確かに二重母音になることがあるが、Эй は二重母音ではなく長母音か母音連続 (ТАТЭЙТО (縦糸) の Эй は母音連続である) である。Ий が二重母音であるという言及がないのは、まさにモンゴル語の Ий が二重母音ではないからであろう。モンゴル語の Эй は Ээ と同じく長母音であるが、日本語においても事情は同じであることになぜ気がつかないのであろうか。<sup>2)</sup>

このページには記述の間違ひが多い。次の記述も正しくない。

- (3) 日本語の Н はモンゴル語の舌の奥の (=口蓋垂) Н と同じである。[ 9 ]

この記述の H は「ん」のつもりであろうが、それでも少し問題がある。日本語の H がモンゴル語の舌の奥の（＝口蓋垂の）H になるのは、語末、摩擦音、半母音および母音の前のみである。閉鎖音、破擦音、鼻音の前では逆行同化を起こす。<sup>3)</sup>

- (4) 日本語の Г はモンゴル語の舌の奥の（＝口蓋垂の）Г に近く発音されることに注意しなさい。[9] <sup>4)</sup>

この記述の意図がよくわからない。ともかく、日本語のガ行音の子音は口蓋垂子音ではなく軟口蓋子音である。あるいは鼻濁音のことを説明しようとしてこのような舌足らずの表現になっているのであろうか。そうだとするなら、鼻濁音の起こる位置についての説明が欠けているし、調音点に関する記述も正しくない。

- (5) 日本語の K, C, T, X を有声化し Г, З, Д, Б, П という有声子音を作る。[16]

П は無声子音であるから除かなければならない。ハ行、バ行の関係は単に無声音、有声音という関係ではないのであるから、有声化という変化ではない。また X は摩擦音であり対応する有声音は Б ではない。

## 2. 表記

本書では拗音を子音＋補助母音で表している。拗音を補助母音で書くのはそれなりに一貫性があるが、全体としては一貫性を欠いている。本書にはサ行音は СА, ШИ, СУ, СЭ, СО, ШЯ, ШЮ, ШЁ と表記している。

モンゴル人にわかりやすくするのであれば СА, ШИ, СУ, СЭ, СО, ША, ШУ, ШО のほうが優れている。一貫性を保つのであれば СА, СИ, СУ, СЭ, СО, СЯ, СЮ, СЁ のように表記するべきである。ともかく ШЯ, ШЮ, ШЁ という表記を見てモンゴル人はどういう音声を発声するのであろうか。本書の表記及び他の二つの表記を並べて書くと次のようになる。モンゴル人にわかりやすくするのであれば B のほうがすぐれているし、一貫性を重視するなら C のようにすべきである。<sup>5)</sup>

	サ	シ	ス	セ	ソ	シャ	シュ	ジョ
A 本書の表記	СА	ШИ	СУ	СЭ	СО	ШЯ	ШЮ	ШЁ
B	СА	ШИ	СУ	СЭ	СО	ША	ШУ	ШО
C	СА	СИ	СУ	СЭ	СО	СЯ	СЮ	СЁ
	タ	チ	ツ	テ	ト	チャ	チュ	チョ
A 本書の表記	ТА	ЧИ	ЦУ	ТЭ	ТО	ЧЯ	ЧЮ	ЧЁ
B	ТА	ЧИ	ЦУ	ТЭ	ТО	ЧА	ЧУ	ЧО
C	ТА	ТИ	ТУ	ТЭ	ТО	ТЯ	ТЮ	ТЁ

	ザ	ジ	ズ	ゼ	ゾ	ジャ	ジュ	ジョ
A 本書の表記	ЗА	ЖИ	ЗУ	ЗЭ	ЗО	ЖЯ	ЖЮ	ЖЁ
B	ЗА	ЖИ	ЗУ	ЗЭ	ЗО	ЖА	ЖУ	ЖО
C	ЗА	ЗИ	ЗУ	ЗЭ	ЗО	ЗЯ	ЗИО	ЗЁ

「です」「ます」が ДЭС, МАС と表記されている。これが母音の無声化を意識したものであることは直ちに理解されるが、それならば「学生」は ГАКСЭЭ と表記するべきであるのに、実際は ГАКУСЭЙ となっている。КАКИМАС ГА「書きますが」[76] の場合は C の後の母音は無声化しないので、この表記は具合が悪い。

「その女」が СОНООННА [53] と記されているが、分かち書きをしていないので大変読みにくい。「その」と「女」とを続けると、母音連続が長母音かすぐには判断できない。

「金曜日」が КИНЁОБИ となっている [57] が、これではキニョービと発音されてしまう。せめて КИНЬЁОБИ ぐらいにできないものか。<sup>6)</sup>

以上述べたのは日本語をキリル文字で表記した場合の問題であるが、次に述べるのは日本語本来の問題である。まず表記としてではなく、読み方として次のような記述がある。

(6) 和語及び漢語は漢字または平仮名で記す。片仮名ではただ外来語だけを記す。[12]

擬声語や生物学上の名称なども片仮名で書かれるという事実も大切である。漢字の音を片仮名で書く習慣は広く行われており、本書でもそうになっている。

(7) 「は」は主格の場合は「わ」と読む。[22]

例として「これは」「はるは」「こんにちは」「わたしは」が挙げられている。この書物の序文に「いろんな年代のいろんな専門の人たちのためのものなので、言語学用語をできるだけ少なくし、なるべく普通のことばで説明するように努力した」と記されているので、「主格」という用語の選択及び用い方はひとまずおくとしても、「こんにちは」のような場合の「は」をモンゴル人がすんなりと理解できるであろうか。「～ではありません」の「は」も理解しにくいであろうと思われる。「主格」という用語は避けるべきであろう。

(8) ひらがなに「う」を付けて長音節を記す。[22]

例として「そう」「こう」「よう」「ゆう」が挙げられている。

「とお(十)」,「おおきい」のように「お」を書く場合もあることが忘れられている。48ページに漢字「十」の訓読みとして「とう」という間違った表記が記されているので、著者は正しい知識が不足しているようである。さらに長音節はオーとは限らない。「えい」「ええ」の書き分けについても一言触れておくべきである。これに先立って16ページに長母音をキリル文字でどう表すかの説

明があるが、そこでもオー、ウーの例だけで、アー、イー、エーの例が忘れられている。

(9) 変化しない部分を漢字で書く。[43]

この記述に続いて「見る」「大きい」「言う」の3つの例が挙がっている。「見る」についてはまったく問題がないが、「言う」のような子音語幹動詞の場合 iw が変化しない部分だと解すると、iwanai「言わない」では変化しない部分の w は平仮名「わ」の一部であるから、この説明では不十分である。仮名が子音と母音とを分離できない文字であるということを説明しておく必要がある。「大きい」の場合は「大き」が変化しない部分であるから、上の説明は明らかに間違っていることがわかる。

表記の問題としてさらに次のような例がある。

A オーの長音の表記が正しくない語

ページ

48	とう	とお (十)
91	あの一	あの一
91	おっしゃった とうり	おっしゃった とおり

B 短母音を長母音で表記している語

32	ジョーン	ジョン
31	ドル	ドル
31	ソファー	ソファ
67	УРААНБААТОРҮ	УРАНБААТОРҮ
94	キリール文字	キリル文字

C 促音が表記されていない語

48	МИЦҮ	МИЦЦҮ
48	ЁЦҮ	ЁЦЦҮ

D 仮名書きすべき語を漢字で記している語

80	色々の	いろいろの
80	ナーダムの 時	ナーダムの とき
80	のんで見ました	のんで みました
81	話して上げます	話してあげます
89	出来る	できる

E 語彙 (語義) の選択に問題がある語

94	字書	辞書
----	----	----

日本語には正書法がないといわれているくらいであるから、Dについては異論があるかもしれない

い。しかし漢字をわずか139字しか提示していない本書においてこれらの語を漢字で書く必要はないと思われる。覚えた漢字を使いすぎるといふ悪い癖が一部の学習者に見られるが、これを避けるためにも不必要に漢字を使わないようにすべきであろう。

62ページの語彙リストには「ぺきん」と平仮名で書かれているのに、63ページの本文には「ペキン」と片仮名書きになっている。こういう不統一は避けるべきである。

次に分かち書きについて述べよう。キリル文字で表記されている部分は、格助詞を離して書く、「です」は前の語から離して書く、などの一貫性が見られる。もっとも「この」「その」等を次の語とくっつけて書くのは賛成できない。漢字仮名混じり文の部分は分かち書きに不統一が多い。分かち書きのルールがまったくないかのようである。

例えば44ページの「です」はほとんど前の語から離して書いてあるのに、一例だけくっつけて書いてある文がある。

はい とても よい てんきです [44]

「漢語動詞語幹+する」は離して書いてあるものと付けて書いてあるものとがあるが語幹の長さとは無関係である。

離して書いてあるもの	付けて書いてあるもの
べんきょう しています [50]	あいさつしました [63]
さんか しました [73]	さんぼします [72]
	しょうたいする [64]

複合語は離して書いてある語とくっつけて書いてある語とある。前に来る要素の長さは無関係である。「いんさつ こう場」のような後部要素が3モーラ以上の複合語を離して書くのは、アクセントの面からも誤解を招きやすいので問題がある。<sup>7)</sup>

離して書いてあるもの	付けて書いてあるもの
うえの どうぶつえん [64]	えいがかんとく [63]
いんさつ こう場 [80]	モンゴル人民共和国 [80]
中おう ゆうびんきょく [80]	スヘバートル広場 [80]
	せいふきゅうでん [80]
	平和どうり [80]
	モンゴルの民ぞくさいじつ[80]

連用修飾語が動詞とくっつけて書かれている場合と、離して書いてある場合とある。また、名詞と格助詞がくっつけて書かれている場合と、離して書いてある場合とある。同じページでも異同がある。64ページと72ページから例を引いてみる。

64ページ

パンダを見ました  
バスで行きました  
都市と村が  
京都は日本の…  
おおさか から

72ページ

えが 見えます  
つくえ と と の 間に  
美しい花をかざります  
そのじびきは  
私のラジオは  
私のへやの カーテンは  
私の へやの となりの  
そのたてものは  
美しいたてもの です  
そのへやのまん中に 大きくて  
円い テーブルが  
まどの 左側の かべに  
だれか と いっしょに

「ではありません」の「では」と「ありません」とはほとんどすべてくっつけて書いてあるが、この部分を離さないで書くのは全体のバランスからいって不自然である。

二年生の きょうしつ は にぎやか ではありません。[57]

### 3. 文法解説

文法解説の部分で不適切なものを列举してみよう。

- (10) 話し手の近くであれば「これ」、より遠ければ「それ」、さらに遠ければ「あれ」という。  
[15]

これが事実でないことは既に周知のことである。話し手以外に聞き手の位置関係を見捨てることはできない。話し手と聞き手の眼前にない物や事柄について述べるときの用法についての説明が欠けている。後述するように、「それは」とすべきところを「これは」とした間違いがある。「ここ」「そこ」「あそこ」については別の箇所[28]に説明があるが不十分であり、後述するように「そこで」とすべきところを「あそこで」とした間違いがある。

格助詞「に」の説明は17ページにあるが、「わたしに」「かわむらさんに」という例から見ると間接目的語を表すものしか挙がっていない。一方36ページの表では「モンゴルに」という場所を表すと思われる例が載っている。「で」については34ページに「ビデオ で みます」「ペン で かきます」「きしゃ で いきます」という手段・道具の例と「コンピューター センター で はたらかします」という場所の例とが挙がっているが、場所を表す「に」と「で」との区別については何



の説明もない。この使い分けは多くの外国人にとって困難であるが、モンゴル人にとっても例外ではない。

18ページの「～ましょう」の項目に「紹介 しましょう」「三人 で みましょう」「テレビ を見ましょう」の例と共にモンゴル語訳が載っていて、主語が単数の場合と複数の場合との区別がうまく訳されている。しかし、「～ましょうか」の説明が十分でない。挙げられている例文は「きょう鈴木さん と いっしょに モンゴル の 新しい 映画 を 見ましょう か」だけなので、主語が単数のときの誘いかけ文の例が足りない。<sup>8)</sup>

- (11) 「が」の形 例えば「これが ほん です」「わたしが がくせいです」この場合「これが」というのは「ほかのものではなくこれが」という意味を、「わたしが」というのは「ほかの人ではなく私が」という意味を表している。[36]

これでは総記の場合しか説明していないことになる。にもかかわらず、同じページに「わたしはほんが すき です」という文が挙げられている。この「が」については何の説明もない。さらに後述(4.3, 4.1)するように、実際の文の中で「が」とすべきところを「は」としている間違いが非常に多い。また、非自制性述語の目的語を表す「が」を「を」としている間違いが非常に多い。

50ページに「がいこくごは 日本ごを ならっています」という文が挙げられているが、この文の「は」について何らかの説明が必要である。

格助詞としては次のような名称とともに例が表になって挙げられている。

主格	は	私は	到達格	まで	晩まで
	が	私が	具格	で	ペンで
属格	の	日本の	共同格	と	あなたと
与位格	に	モンゴルに	方向格	へ	学校へ
対格	を	本を	比較格	より	私より高い
奪格	から	朝から			

形態が違っている格には違った名称を与えているが、主格だけは「は」「が」の二つが含まれている。しかしモンゴル語では比較格は奪格と同じ形態をもっているので、「より」を「から」とはっきり区別して違った名称を与えているのは卓見である。「と」自体については「共同格」「という」「接続詞」の三つの場合に分けて詳しい説明があるのに、日本語で並列の「と」とともに頻繁に用いられる「や」についての説明も例もないのは物足りない。

動詞のグループ分けに関して40ページに次のような記述がある。

- (12) 動詞の語幹の形態を取り出す目的ですべての動詞を二つに分ける。

第一変化動詞に KY, ΓY, CY, IY, HY, BY, MY, PY, AY, OY, YY で終わる動詞を含める。

第二変化動詞に ЭРҮ, ҮРҮ で終わる動詞を含める。

「する」「くる」は別のグループになっているので問題はないが、第1変化動詞に ИҮ(例えば「言う」)が抜けている。しかしさらに重要なのは ЭРҮ, ҮРҮ (ИРҮ の間違いか?) で終わる動詞には第2変化動詞だけではなく第1変化動詞もある。たとえば НЭРҮ は第1変化動詞「練る」、第2変化動詞「寝る」の両方がある。КИРҮ は第1変化動詞「切る」、第2変化動詞「着る」の両方がある。

この記述のまずい点は、普通体の否定形以外の形式から語幹を一義的に取り出す方法はないにもかかわらず終止形から動詞語幹を取り出そうとしたところにある。第2変化動詞の語幹は И または Э でしか終わらないというのは事実であるから、そのまま記述すればよかったわけである。終止形から一義的に言えるのは、「АРҮ, ОРҮ で終わる動詞は第1変化動詞である」ということだけである。<sup>9)</sup>

さて本書では動詞の語幹を第1語幹から第4語幹までに分けてある変化表と第5語幹と「て／で」語幹とを示した表とがある。第1語幹は否定形が続く語幹、第2語幹はいわゆる連用形、第3語幹は仮定形「ば」が続く語幹、第4語幹は志向形の「う／よう」が付いた形、第5語幹は音便形(第2変化動詞は第2語幹と同じ)である。命令形は載っていない。仮定形はI巻には扱われていない。表にだけ形式を掲げるのはどんなものか。

第3語幹は「ば」しか続かない形、第4語幹は「う／よう」が付いた形を語幹として挙げてあるのはまったく一貫性を欠くと言わざるをえない。しかも、この表は平仮名表記ではなくキリル文字表記である。子音で終わった形を記すことはいとも簡単であるのにである。

さらに重大な欠陥がある。「話す」は第1語幹から第4語幹までを記した表では第1変化動詞に入っているのに、第5語幹を記した表では「する」「来る」と同じグループに分類している。「話す」の第5語幹は「話し」であり、「する」の第5語幹「し」と共通性があるから、あえて表を二つに分けてこうしたのであろう。しかし、これでは、ある動詞が語幹の形式によって違ったグループに属してしまうことになり、非常に具合が悪い。

「ねえ」に関して次のような記述がある。

(13) 「ねえ」 心の動きを表し会話を発展させる目的で用いられる感嘆詞 [45]

例文として次の三つが挙げられている。右のモンゴル語は訳に使われている語である。

きょうは いい 天気 ですねえ。	ШҮҮ
映画を 見たい ですねえ。	дээ (実際は даа)
これは ですねえ。	ШҮҮ

最初の例は同意要求、2番目の例は詠嘆、最後の例は感動詞の例である。これだけいろいろな例

が挙がっているのは結構なことであるが、もちろんこの説明では不十分である。上述の例文の「ねえ」に対するモンゴル語訳に *шүү* と *дээ* が使われているように、モンゴル語には *шүү*, *дээ*, *шүү дээ* などがある。一方日本語も「ねえ」以外に少なくとも「よ」についても触れておかなければ片手落ちになる。「よ」を全く使わないで「ねえ」ばかり使って話すモンゴル人に会ったことがある。この話者は本書を使って日本語を学習したのではないが、同じような傾向がみられるということは重大である。著者は上記の最初の例文を *шүү* を使って訳しているが、*шүү* ならむしろ、「きょうはいい天気ですよ」のほうに近い。著者はこの違いを十分に把握していないのではなかろうか。また「ねえ」だけでなく「ね」もあるという点が忘れられている。イントネーションに少なくとも3種類あるということも大事な点である。本書の記述ではこういったことがまったく配慮されていない。

(14) *юу* というのを日本語で二つの形態（なん、なに）で表す。[45]

例として「なんと いいですか」「なにを しますか」「なんがつ ですか」が挙がっている。著者は正しく使い分けを習得しているものと思われるが、学習者はこれだけの説明では正しく習得できないであろう。「なんがつ」「なんにち」等の「なん」は51ページに説明があるので問題はないが、「なにが」「なんで」のような区別も説明しておく必要がある。

(15) 「ています」は現在進行形を表す。[47]

例として次のものが挙がっている。「待って います」「思っ ています」「読んで います」「学んで います」「書いて います」「聞いて います」「して います」「来て います」

モンゴル語はすべて *-ж байна* の形式で訳されている。従って「来ています」は「いま来ているところです」の意味に解されていることになる。しかし日本語で「来ています」というのは、主語が単数で一回の行為のときは「すでに来ています」を表すのが普通であるから、この例文を挙げるのはよくない。著者はこのことについて正しく理解していないようである。

(16) *イ* 形容詞語幹 + *くて* *イ* 形容詞語幹 + *い* [53]

おもしろくて よい 本 です。

広くて 明るい 部屋 です。

二つ例文を挙げておきながら両方とも限定的用法の例文であるのは片手落ちである。述語的に使う用例がぜひ必要である。

(17) *ナ* 形容詞語幹 + *で* 形容詞語幹 [54]

静かで 小さい 都市です。

きれいで りこうな 女 です。

二の例文のうち、一方が*ナ*形容詞+*イ*形容詞、他方が*ナ*形容詞同志の例を挙げながら両方とも限

定的用法の例文であるのは片手落ちである。述語的に使う用例がぜひ必要である。イ形容詞＋ナ形容詞の組み合わせも可能なので、さらに工夫が必要である。

(18) イ形容詞語幹 い + でした [58]

イ形容詞の丁寧体否定形の述語的用法として「～く ありません」、イ形容詞の丁寧体否定形の過去形として「～く ありませんでした」の形式だけ採用しているのに、イ形容詞の普通体過去形を「～い でした」の形式を示しているのは不可解である。実際に「あついでした」「おもしろいでした」「旅行したい でした」という表現が現れる。この形式はまだ容認されていない形式であり、日本語の普通の教科書にも日本人の発話にも現れない。これは著者の独断的な誤解であろう。84-85ページに「「ペンは 赤かった です」とも言う」という記述があるが、こちらのほうを初めから挙げるべきである。ほかに「楽しいだ」のような誤った形が現れるので、この著者は初等レベルの文法ですら十分に習得していない点がある。

73ページに「～てあげます」「あげる」「くださる」「ください」の形式があるのに、「さしあげる」「くれる」「いただく」の形式が挙がっていない。後述(4. 7)するように「くれました」とすべきところを「あげました」とした間違いがある。

「こと」例文について75ページに次の例文が挙がっている。

1. よむ こと が でき ます。(キリル文字)
2. にほんご で はなす こと は むずかしい です。(キリル文字)
3. がっこう で ならった こと を わすれないで ください。(キリル文字)
4. いま いちばん たいせつな こと は ぶんぼうを ふくしゅうする こと です。(キリル文字)

1, 2の「こと」は動詞や節を名詞句に変える働きを持つが、3, 4の「こと」は関係節の被修飾語である。両者の区別は大切である。「の」については何も記述がないが、「こと」と「の」の使い分けも重要である。

- 1'. \* よむ の が でき ます。
- 2'. にほんご で はなす の は むずかしい です。
- 3'. ?がっこう で ならった の を わすれないで ください。
- 4'. いま いちばん たいせつな の は ぶんぼうを ふくしゅうする こと です。
5. \* いま いちばん たいせつな こと は ぶんぼうを ふくしゅうする の です。

モンゴル語には「こと」「の」に対応する形式が存在しないためこれらの形式に関する取り扱いがいかげんになってしまったようである。<sup>10)</sup>

82ページに「出る」「行く」などの動詞は「を」を要求するという記述があり、「ホテル を 出

る」「平和通り を 行く」の例が挙げられている。一方は起点，他方は通過地点の例であり，一応説明は足りているように見えるが，後述するように「流れる」という動詞と共に「に」，「散歩する」という動詞と共に「で」を用いた文が挙げられていることから明らかなように，著者はこの用法を十分に習得していない。

82ページに動詞の第2語幹（連用形）に「もの」を付けて名詞ができるとして，「飲物」「食べ物」「着物」「買物」「建物」の例が挙げられている。訳語は正しいが，これらのうちで「買物」は他のものとは性質が異なる。一言説明が必要である。見えるものを表すのが「もの」で見えないものを表すのが「こと」であるという64ページの説明とも矛盾する。

83ページ以降に敬語の説明がある。著者は日本語には「普通」「普通尊敬」「尊敬」の3段階の敬語があるとして次のような説明をしている。

普通（ЭНГИЙН）

友達や親しい人の間で話者が自分側の人と話し，それらの人たちについて他人に話すとき

普通尊敬（ЭНГИЙН ХҮНДЭТГЭЛИЙН）

知らない人や先生，尊敬すべき人たちと，彼らについて話すとき

尊敬（ХҮНДЭТГЭЛИЙН）

天皇，先生，指導者など非常に敬意を示すべき人たちと，それらの人たちについて話すとき

この説明が基本的に正しくないことは明らかである。主語に呼応するか目的語に呼応するかで選択が決まる謙譲語／尊敬語の説明になっていない。

これに続いて述語の普通尊敬（ЭНГИЙН ХҮНДЭТГЭСЭН）と普通（ЭНГИЙН）の説明が載っている。こちらのほうは「丁寧体（あるいは敬体）」「普通体（あるいは常体）」と置き換えれば正しいし，関係節及び「～と思います」の構文の中で普通体を使う場合に関する記述は正しい。なお4. 11を参照。

著者はモンゴル語の用語を前者の「尊敬」では ХҮНДЭТГЭЛИЙН，後者の「尊敬」では ХҮНДЭТГЭСЭН と一応区別しているが，「普通」は共に ЭНГИЙН で訳してあるので，区別はあいまいである。

続いて87ページに次のような表が載っている。この表の「普通」を「謙譲語」，「普通尊敬」を「普通の形」，「尊敬」を「尊敬語」を置き換えて動詞の部分だけを見ると，一部は正しく一部は間違っている。名詞は著者の認識どおり尊敬の3段階を表しているようである。

普 通	普 通 尊 敬	尊 敬
いる，おる	いる	いらっしゃる

人, 者	人	方
まいる	来る, 行く	いらっしゃる
いただく	食べる	めしあがる
言う	言う	おっしゃる
誰	誰	どなた
する, やる	する	いたす
僕	わたし, わたくし	
君	あなた	…先生
…君	…さん	…様

86ページの説明では「なさる」を尊敬, 「いたす」を普通と一応正しく区別しているにもかかわらず, 表では「いたす」が尊敬になっているという不一致もある。

そもそも動詞と名詞を同じカテゴリーで分類しようというのが無理である。動詞の部分は, 少なくとも次のように修正する必要がある。

<u>謙 讓 語</u>	普 通 の 形	<u>尊 敬 語</u>
いる, おる	いる	いらっしゃる
まいる	来る, 行く	いらっしゃる
いただく	食べる, <u>飲む</u>	めしあがる
<u>申す</u>	言う	おっしゃる
<u>いたす</u>	する	<u>なさる</u>

#### 4. 文法上の間違い

例文中に現れる文法上の間違いには次のようなものがある。

##### 4.1. 非自制性術語 (non-controllable predicate) の目的語をマークする格

次の各文に現れる目的語をマークする「を」はすべて「が」と改めるべきである。

あなたは これを わかりますか。[22]

日本語を まだ わかりません でした。[64]

私は アイスクリームを たべたいです。[63]

かんじ を わかりません ので (キリル文字) [75]

「できる」の目的語は「を」でなく「が」で記されている [76] が、次の文の場合「は」のほうがよいようである。

にはんごで よむ ことが できません。(キリル文字) [75]

81ページで「じょうず」「へた」「好き」「嫌い」の目的語が「が」をとるという正しい説明がなされているのに、「わかる」「～たい」の場合にどうして同じ理解が及ばなかったのであろうか。

#### 4.2. 「…を …といいます」

モンゴル語の表現がそっくり日本語に反映されたのが次の間違いである。「を」はすべて「は」に改めるべきである。

わたし を すずき と もうします。(キリル文字) [18]

わたしの ともだちを ユラといいます。[34]

りんごを モンゴルで なんと いいますか。[44]

りんごを モンゴルで АЛИМと いいます。[44]

わたしの なまえを バヤルといいます。[50]

あなた の なまえ を なんと いいます か (キリル文字) [59]

私を 山田と もうします。[80]

#### 4.3. 「は／が」の間違い

まず中立叙述の「が」の用法の間違いがある。次の「は」は「が」とすべきである。

きのう ゆきは ふりました。[51]

中立叙述の「が」がすべて間違っているわけではない。次の2例は正しい。

手紙 が 来た。(キリル文字) [85]

冬 休み が 始まった。(キリル文字) [85]

次の2例は「私のへや」へ案内している場面での表現である。10階建てのアパートの5階にエレベーターで案内して来た後の文が次のようになっているが、「は」は「が」とすべきである。

エレベーターの ちょうど前は 私の いえです。[72]

入ると 左側は 私の へやです。[72]

同じページに次のような文がある。部屋の中を説明しているのであって、「ラジオ」や「テレビ」が話題になっているのではないから、「は」は正しくないし、主語は場所を表す語句の後ろに置くべきである。

ラジオは 本 だなの 左 に あります。[72]

テレビは ソファー の 側 の つくえ の 上 に あります。[72]

聞き手にとって新しい情報がどれであるかが著者には正しく認識されていない。次の例は「は」とすべきところを「が」としたものである。既出の名詞を受けるのは「が」でなく、「は」であるということを著者は正しく理解していない。

ドルジさんは むすこ が 四人います。こどもが みんな うまに のる ことが じょうず です。[80]

#### 4.4. 「は」の用法の違い

次の2例では、否定文では「を」よりも「は」のほうが自然であるということが忘れられている。

いいえ、この本を よ みませんでした。[44]

この みず を よ のみたく ありませんでした。（キリル文字）[78]

最初の文における「よみませんでした」というのも正しくないが、これについては後述（4.9）する。

対比にも「は」が用いられるということが著者にはよくわかっていないらしい。次の「を」は「は」に改めるべきである。

ラジオ を き きます が、テレビ を み ません。（キリル文字）[76]

次の文における「を」も「は」に変えるべきである。

— あのー、バヤルさん、食どうへ 行きませんか。

— すみません、先生。ひるごはんを もう いただきました。[91]

次の文には「は」がないと落ち着きが悪い。

ウランバートルは 3月 に さむい です けれども… [91]

#### 4.5. 格助詞の用法

「や」という助詞は本書には現れないが、次のような文を見るときわめて大事であることがわかる。また「都市」というのは「町」とすべきであろう。

とちゅうで 都市と村 が 見えました。[64]

「見る」という動詞の対象は「へ」でなく「を」である。

した へ み る と（キリル文字）[65]



へやの まどから 下へ 見ると 大きい にわが 見えます。[72]

自動詞のうちで動きを表現するものに「を」を要求するものがあることはよく知られた事実であり82ページにも一部触れられている。しかし次の文をみると著者はこのことを十分理解していないようである。最初の文の「に」、2番目の文の「で」は「を」とすべきである。

たてものの 前に 川が ながれます。[72]

川の むこう側に もり が 見えます。あそこで 私は いつも だれか といっしょ に さんぽします。[72]

「ながれます」は「ながれています」とすべきである。これについては後述(4.9)する。

同じ用法を表す格助詞は「の」を除いて一つの節の中に一つしか現れないという一般的な制約がある<sup>11)</sup>。次の文の最初の「に」は不要である。「上げます」はすでに述べたように仮名書きにすべきである。

しりあいの 人に みんなに 話して 上げます。[81]

次の文における「の」は間違いではないが、なくてもよいものである。

わたしは あさの 七じに おきます。[50]

ひるの 二じに 大学の しょくどうで しょくじ します。[51]

類似した表現「○月○日」という言い方をするモンゴル人に会ったことがある。両方ともモンゴル語からの言語干渉の結果起こった現象である。

関係節の主語はモンゴル語ではすべて属格で表されるため、それと対応する「の」に限定したのかもしれないが、本書では次のようにすべて「の」で表されている。これはもちろん間違いではないが「が」の例も必要である。

わたし の きらいな おんな (キリル文字) [81]

わたし の すきな せんせい (キリル文字) [81]

あなた の よむ ほん は どれ です か。(キリル文字) [84]

わたし の よんだ ほん を よんで ください。(キリル文字) [85]

せんせい の おしえた かんじ を いま れんしゅう して います。(キリル文字) [85]

#### 4.6. 「そこ／あそこ」

聞き手の眼前に存在しない場所を指し示すときは「あそこ」ではなく「そこ」でなければならない。事物の場合は「それ」でなければならない。これらを「あそこ」「あれ」で表現するという共通の間違いが外国人日本語話者に見られる。本書でも、ことごとく間違っている。

うえの どうぶつえんは おもしろいでした。 あそこで パンダを見ました。[64]

私たちの アパートの 後ろに 大きくて たかい たてものが あります。あれは 学校です。[72]

川の むこう側に もり が 見えます。あそこで 私は いつも だれか といっしょにさんぽします。[72]

私は あそこで はじめて ばにゅうしゅを のんで見ました。[80]

ドルジさんのおくさんは しろい のみ物を 上げました。これは ばにゅうしゅ でした。[81]

「おもしろいでした」は「おもしろかったです」,「のんで見ました」は「のみました」とすべきである。これらについては後述(4.12, 4.9)する。

#### 4.7. 「あげる／くれる」

次の文における受益者は「私たち」であるから明らかに間違いである。モンゴル語では「あげる」も「くれる」も同じ語で表現されるので、こういう間違いが起こりやすい。文法の説明では著者は正しく解説しているのに、実際の例文ではこういった間違いを犯してしまっている。

ドルジさんのおくさんは しろい のみ物を 上げました。[81]

次の文自体は間違いではないが、主語が「私」のつもりなら「教える」の後に「～てくれる／くださる」が必要である。

せんせい の おしえた かんじ を いま れんしゅう して います。(キリル文字) [85]

#### 4.8. ボイス (Voice)

受動文はⅠ巻では取り上げられていないので著者には酷であるが、やはり無視できない。モンゴル語にも受動文が存在するが、使用頻度は日本語より低い。次の文はモンゴル語をそのまま日本語に訳したもののようである。

私を ともだちが しょうたい しました。[63]

だれかが よびました。[63]

前者は「ともだちが しょうたいして くれました」とすべきである。後者は空港で迎えの人を探しているときの表現なので、「だれかに よびとめられました」あるいは「だれか よぶ ひとが ありました」とすべきである。

#### 4.9. アスペクト (Aspect)

本書では「～ています」の説明として現在進行形の用法しか挙げていないが、日本語には習慣を表すときにも「～ている」の形式を使わなければならないものがある。次の文は単独では未来形と

解釈できる正しい文であるけれども、対応するモンゴル語訳や著者の意図から判断して正しくない。

あなたは えいご を ならいますか。(キリル文字) [17]

はい、わたし は えいご を ならいます。(キリル文字) [17]

コンピューター センターで はたらきます。(キリル文字) [34]

私は モンゴル語を 習います。[80]

現在の状態を表すとき「～ている」の形式を使わなければならないものがある。

私は つくえの上に 美しい花をかざります。[72]

たてものの 前に 川が ながれます。[72]

次の文は否定の場合である。最初の文は「よんでいません」、2つめの文は空港で迎えに来てくれた人を探す場面での表現であるから、「来ていませんでした」とすべきである。

— この 本を よみましたか。

— いいえ、この本を よみませんでした。これから かいましょう。[44]

だれも むかえに 来ませんでした。[63]

本書では「～ておく」については触れられていないので、著者には酷であるが、次の会話はやはり不自然である。「おぼえておく」という言い方でないと不自然である。

— りんごを モンゴル語で なんと 言いますか。わたしは もう わすれました。

— りんごを モンゴル語で АЛИМ と 言います。よく おぼえて ください。

— はい よく おぼえました。[44]

次の文は「はじめて」があるために「～てみる」を用いるのは不自然に聞こえる。「のみました」あるいは「のむことができました」とすべきである。「あそこで」は前述(4.6)のとおり「そこで」が正しい。

私は あそこで はじめて ばにゅうしゅを のんで見ました。[80]

#### 4.10. 「の／こと」

次の文に現れる「こと」は「の」とすべきである。

旅行 する こと が きらい です。(キリル文字) [76]

ドルジさんは むすこが 四人います。こどもが みんな うまに のる こと が じょうず です。[80]

うまに のる ことは おもしろい こと です。[81]

#### 4.11. 普通体／丁寧体

従属節で普通体を使わなければならない場合がある。次の文は普通体を義務的に使わなければならない場合ではないが、教科書に挙げる文としては普通体にすべきである。「れきしてきの」は「れきしてきな」とすべきである。なお4.13を参照。

あるいて いますと [63]

いろいろの れきしてきの めいしょを 見ましてから [64]

次の文は義務的に普通体を使わなければならない場合である。「大きいか」と訂正しなければならない。

『おおさか は 東京と おなじ 大きい』と 川村さん が 言いました。どちらが 大きい ですか。私はわかりません でした。[64]

前述のように、関係節、「～と思います」の構文において普通体を用いることは、著者は承知しているのに、上述の文における普通体の使用については著者は認識していないようである。

普通体ばかりで書かれている文に、一文だけ丁寧体が混じったものがある [90]。初級レベルの文章としては避けるべきである。

手紙の例として普通体で書かれた文章が採用されている [90] が、好ましくない。普通体の文章の例を挙げたいのなら日記文を採用すべきであろう。話しことばの場合、普通体の採用はさらに困難であり、適切な終助詞が可不足なく使われていなければ不自然になる。友人宛の手紙文でも同じことがいえる。

#### 4.12. 活用

前述したように本書ではイ形容詞の丁寧体過去形の取り扱いが正しくない。

あついでした [63]

うえの どうぶつえんは おもしろいでした。[64]

前から モンゴルへ 旅行したい でした。[80]

次の文は、外国人日本語話者にはよくみられる間違いであるが、本書も間違っている。繰り返し出てくるので不注意ミスではない。

赤い だ (キリル文字) [83]

ペン は 赤い だ と 言いました。(キリル文字) [84]

スケートをやる ことが 出来るので 楽しいだ。[90]

#### 4.13. 語形

次の「の」は「な」とすべきである。

いろいろのれきしてきのめいしょ [64]

#### 4.14. 数量表現

数量に関する不適切な表現として次のようなものがある。「いちにちかん」の「かん」は不要,「六つ」,「七つ」の「つ」は「冊」,「二日間」は「二日かかって」,「おなじ」は「おなじように」あるいは「おなじぐらい」,「二番目」は「二通目」あるいは「二回目」,「三番目」は「三時限目」あるいは「三時間目」とすべきである。

いちにちかん (キリル文字) [60]

ノートは 六つ でしたか。いいえ, 六つ ではありませんでした。七つ でした。[63]

私は 9月 7日にウランバートルを でて,ベキンまで 二日間 きしゃで 行きました。[63]

おおさかは 東京と おなじ 大きい [64]

先週, 君から 二番目の 手紙が 来た。[86, 90]

三番目 の 授業 は 日本語 の 授業 です。(キリル文字) [86]

#### 4.15. 語の乱用

次の最初の文における「たち」は省略可能である。2番目の文の「たち」は不要である。

となりの きょうしつは 一年生たちの きょうしつ です。[57]

一年生たちは 十人ぐらい です。[57]

次の例における「過ぎ」は不要である。

8時 20 分 過ぎ [67]

#### 4.16. 構文上の間違い

次の間違いも外国人日本語話者に非常によく見られる間違いである。「思う」の主語と「招待する」の主語とが一致する場合は「～しよう」の形式でなければならない。次の文で主節の主語と従属節の主語とは、文脈から判断してともに「私」である。

今年は 川村さんを モンゴルへ しょうたいすると おもっています。[64]

この文型がすべて間違っているわけではなく、次の2つの文は正しいので、著者の不注意ミスかもしれない。

今年は 学生の ほようじょへ 行こうと 思う。[90]

また 君に 手紙を 書こうと 思う。[90]

次の文は必ずしも間違いとはいえないが、本書では触れられていない「～たり, ～たりする」あ

るいは中止法の「音楽 を きき、ダンスをして…」という表現にすべきである。

音楽を きいて ダンスをして 時間を 楽しく すごします。[90]

## 5. 省略可能性

日本語には省略できない要素がある。次の文で目的語を省略することはできない。具体的な名詞がない場合でも「水が」という語が必要である。<sup>12)</sup>

のど が かわいて のみたく になりました。(キリル文字) [76]

逆に同じ要素を繰り返さないという特徴もある。次の文における2番目の「馬乳酒」は不要である。

馬乳酒 に ついて 聞いた こと が あります が、馬乳酒 を 飲んだ こと は ありません。(キリル文字) [76]

## 6. 表現

学生を主体にしているときに、「休む」という動詞は正しくない。「休みです」とすべきである。三月八日は国際婦人デーという休日であるから、「休みでした」が正しい。なお、次の文章の最初の「土曜日」は「金曜日」としなければ矛盾する。

学生たちは 月曜日から 土曜日まで べんきょうします。土曜日と 日曜日は やすみます。さいじつは やすみます。三月八日は やすみました。[57]

自分の家への案内の文に次のような文がある。自分の部屋にあるものを「見えます」で表現するのは奇妙である。窓から見えるものについてなら不自然ではない。次の2つの文を比較されたい。最初の「見えます」は「あります」とすべきであろう。2つめの文の「下へ」はすでに述べたように「下を」が正しい。

まどの 側に 茶色の かべに 美しい え が 見えます。[72]

cf. へやの まどから 下へ 見ると 大きい にわが 見えます。[72]

次の文は「ので」の前と後との関係が不自然である。「三か月ぐらしか日本語を ならって いませんので」とするとよくなる。

私は 三か月ぐらいい 日本語を ならいましたので 日本語を まだ わかりませんでした。  
[64]

箱の中にあるお金について尋ねている文で次の言い方は少し変である。「しますか」を「買いま

すか」に変えるか、「このお金をどうしますか／どうするんですか」にすべきである。

この お金で 何を しますか。[73]

次の文はいろいろな問題があるが、既に述べた（2，4.11）部分以外に、初級レベルの教材に用いているのは適切でないと思われる「やる」が用いられている。「する」に改めるべきである。

スケートをやる ことが 出来るので 楽しいだ。[90]

教師が休憩時間に学生と会って、再び授業で会う場合に言う表現としてはいろいろあろうが、次の言い方は日本語らしくない。「では、また授業で」ぐらいにすべきである。

では、じゅぎょうまで さようなら。[91]

## 7. 語彙選択

「都市」に対するのは「農村」が普通である。しかし、この文脈で「都市と農村」はおかしいので、「町や村」とすべきであろう。「と」でなく「や」であるということも大事である。

とちゅうで 都市と村が 見えました。[64]

「古い」と呼応するのは「都」である。

京都は日本の ふるい しゅ都です。[64]

「たびたび」を用いるスタイルではないようである。「よく」と改めればよい。

私は そこに すわって たびたび ざっしをよみます。[72]

「民族祭日」という日本語はない。「民族祭典」ぐらいにしたい。

7月10日は モンゴルの民ぞくさいじつ です。[80]

謙譲語の例文として次の文が挙げられているが、「いたす」と「僕」「です」の文体が合っていない。「私」「ございます」とすべきである。

勉強 いたして いる 者は 僕 の 弟 です。(キリル文字) [87]

本書には「日本語を習う」という言い方が頻繁に用いられている。「勉強する」というほうが普通であろう。

## 8. 語彙

文脈を離れて次のような不適切な語が語彙リストに書かれている。右のように改めるべきである。「にゅうちゃ」は日本語として熟していない。「スーテー・ツァイ」はさらに熟していないけれども、ここではそうするしかない。あるいは「ミルクティー」とでもするしかない。「みどりちゃ」は「緑」の音読みを誤った言い方である。「くうこうじょう」という日本語は存在しない。「れきしてきの」はすでに述べたように (4. 13) 語彙というより文法上のミスである。「おとうさん」「おかあさん」と並べるのであれば、「にいさん」「ねえさん」よりは「おにいさん」「おねえさん」とすべきである<sup>13)</sup>。「じびき」というのは既に古めかしい表現である。「じしょ」も前述(2)のように「字書」ではなく「辞書」である。「しんだい」も古風すぎる言い方である。

## ページ

16	にゅうちゃ (キрил文字)	スーテー・ツァイ
28	みどりちゃ	りょくちゃ
62	くうこうじょう	くうこう
63	れきしてきの	れきしてきな, れきしじょうの
68	にいさん	おにいさん
68	ねえさん	おねえさん
71	じびき	じしょ
71	しんだい	ベッド
80	せいふきゅうでん	せいふちょうしゃ

## 9. 説明不足

間違いではないが説明不足のため、正しく使えるようになるかどうか危ぶまれるものがある。

「もどる」, 「もどってくる」, 「かえる」, 「かえってくる」の違いがこの説明ではわからない。また「でんわを かける」と「でんわする」, 「でんわで はなす」の区別がこの説明からはわからない。

## ページ

63	もどる	буцах
63	かえって来る	буцаж ирэх
70	でんわをかける	утсаар ярих

## 10. 誤訳

次の訳では「妹」「弟」になってしまう。それぞれ дү は不要である。



ページ

94 女性

эмэгтэй дүү

94 男性

эрэгтэй дүү

## 11. その他

67ページに著者自身が混乱している記述がある。

ある分（ふん）дутуу байна(不足している)というのを「過ぎ」、өнгөрч байна（過ぎてい  
る）というのを「前」という。その際、дутуу байна（不足している）というのは時（じ）の  
前半に、өнгөрч байна（過ぎてい）というのは時（じ）の後半に関していう。

この文の前半だけ読むと、日本語の「過ぎ」と「前」とが単に逆になっているように見えるが、  
続けて読むと事実と反することが書いてあることに気付く。全体を次のように改めなければならな  
い。

ある分（ふん）өнгөрч байна(過ぎてい）というのを「過ぎ」、дутуу байна（不足して  
いる）というのを「前」という。その際、өнгөрч байна（過ぎてい）というのは時（じ）  
の前半に、дутуу байна（不足している）というのは時（じ）の後半に関していう。

## 12. 漢字

### 12.1. 訓読みを音読みと間違っているもの

「四」[47]「七」[47]

### 12.2. 音読みを訓読みと間違っているもの

「茶」[56]「百」[70]「毎」[93]

### 12.3. 音読みが記されていないもの

「白」[55]「秋」[61]「川」[61]「村」[61]「花」[69]「夏」[77]「広」[77]「目」[88]「冬」  
[88]「春」[89]「耳」[92]「森」[92]「雨」[92]「雪」[92]「名」[94]

### 12.4. 訓読みが記されていないもの

「都」[62]「民」[77]「共」[77]「出」[78]「平」[78]「元」[89]「社」[93]

### 12.5. 音読みが間違っているもの

「田」[77]「心」[77]「子」[92]

### 12.6. 音読みと訓読みと同じ読み方が記されているもの

「天」[89]「氣」[89]「字」[94]

### 12.7. 音読みを訓読みと間違っているために訓読みが記されていないもの

「毎」[93]

12.8. 訓読みを音読みと間違っているために音読みが記されていないもの

「戸」[93]

13. 誤植

ページ

14	СОТО САМУИ ДЭС	СОТО ВА САМУИ ДЭС
16	ЦУ	ЗУ
50	とまだちに	ともだちに
66	харьлаа	харилаа
67	У	Ү
76	КОТО ГО ДЭКИРУ	КОТО ГА ДЭКИРУ
77	ロク (国)	コク
79	あとずれる	おとずれる
80	このさいじつはを	このさいじつは
91	ИКИМАЁО	ИКИМАШЁО

註

- 1) ロシア語の教科書では「う」を У で表しているが、モンゴル語の音価からいって Y で表すのは妥当である。「お」は О で表さざるをえないが、モンゴル人の中には非常に広い О を用いる話者がいて、「中国」が「中学」のように聞こえることがある。こういう話者には日本語の「お」をモンゴル語の У で発音するように指導する必要がある。
- 2) ИЙ は音韻的には長母音であるが、語末に現れ属格の語尾を添加する際には二重母音と同じ扱いを受ける。例えば、дэлхий の属格 дэлхийн は、нохой の属格 нохойн と同じ異形態がつき、дүү の属格 дүүгийн とは別の異形態がつく。гэртэй (家がある) と гэртээ (自分の家で) とは同音意義語である。
- 3) モンゴル語の Н は日本語の「ん」とよく似た性質を持っていて後続の子音によって同化を起こす。日本語と違う点は摩擦音の前で [n] を保っていることである。
- 4) モンゴル語の Г には軟口蓋閉鎖音、軟口蓋摩擦音、口蓋垂閉鎖音、口蓋垂摩擦音などの異音がある。日本語のガ行音の子音は軟口蓋閉鎖音である。
- 5) ロシア語の З, Ж は摩擦音であるから、日本語を表記するには ДЗ, ДЖ とせざるをえない。また、Ш, Ж は反舌音であるから日本語の調音点とは異なる。一方モンゴル語の З, Ж は破擦音であるからこのままで日本語の「ず」「じ」の子音を正しく表記できる。Ш, Ж は日本語の「し」「じ」の子音と殆ど同じ調音点で発音されるのでこの表記も問題はない。
- 6) 「きょう」と「きお」の区別を本書では КЁО と КИО で表している。子音に後続する ЁО という文字連続はモンゴル語には存在しないし、ИО という文字連続は [jo:] を表すため、モンゴル人にはこれでも依然としてあいまいであるが、これ以外の方法はなさそうである。「～ましょう」と「～ますよ」の区別もモンゴル人には難しいようである。
- 7) 後続要素が3モーラ以上の合成語の多くは後続モーラの第1モーラ目に、アクセントがある。分かち書きをすると、こういった事情がいっそう不明確になる。
- 8) 「～ましょう」はふつうは、複数の主語について用いられるので -я (単数) または -цгаая (複数) で訳す

- のでは少し問題がある。「～ましょうか」は -x yy (単数) または -цгаах yy (複数) で訳すしかないが、前者は「～ますか」も表しうるので説明が必要である。「窓を開けてあげましょうか」の「～ましょうか」の例が挙がっていない、やはり例と説明が必要である。
- 9) 終止形から語幹を取り出す一義的な方法がないことは、本文に示したとおりであるが、「～ます」形からも一義的に取り出す方法もない。語幹の情報が得られるのは「～ない」形のみであるが、日本語教育においてこの形式から学習を始めるのは不自然であるため、通常そういうことは行われていない。辞書の形もアクセントを別にすると「～ない」形で示すのが最も合理的であるが、不自然であるため実行されていない。アクセントの面では連用形のほうが優れている。
- 10) 「学校 で 習った こと」の「こと」は зүйл [75], 「朝 話した ことを 忘れ ないで ください」の「こと」は юм [85] と訳してあるように、関係節の被修飾語「こと」をモンゴル語で表現できないわけではない。経験を表す場合の「こと」はモンゴル語で явдал, удаа [82, 86] などで訳せる。91ページに「いなか へ 行った こと が ある」を Хөдөө явсан удаа бий と「こと」を удаа を用いて訳している。これは単に Хөдөө явсан とも言えるので「こと」と удаа とが同じだというわけではない。「こと」と「の」との使い分けはモンゴル語ではできない。本書では「の」の説明はなく、それを使うべき例文がことごとく「こと」になっている点が問題である。
- 11) 日本語では一つの節に「を」が一度以上現れないという強い制約がある。「に」についても同じで間接目的語を表す「に」は一度以上現れない。「人に」の「に」を残すのであれば、「みんなに」を「全部」に置き換えなければならない。モンゴル語の場合は「人 みんなに」のような言い方しか許されないが、同じ機能を持つ与位格を一つの節の中で一度以上使えないという点では日本語と同じである。
- 12) 英語の drink, write, smoke など目的語を明示しなくても「酒を」「手紙を」「タバコを」という語が省略されていることがわかる。日本語ではこういった目的語は省略できないし、モンゴル語でも省略できない。著者は「のど が かわいて のみたく になりました」に対応するモンゴル語として目的語の юм を括弧付きで書いている。これを日本語に訳せば「何か」となる。
- 13) 本書では、自分の両親や兄弟について語るとき、人の両親や兄弟について語るとき、自分の両親や兄弟を呼ぶときの3つの場合に分けて語彙が記されている。「にいさん」「ねえさん」はこの第3番目の場合の語彙として挙げられているものである。

#### 引用文献

- Бадамрагчаа, Л, Б . Сэржав Япон хэл (эхлэн суралцах бичиг) БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академи Зүүн хойт ази судлалын төв, Улаанбаатар хот 1991
- Төмөрбаатар, Д. зохиосон, Дашням, Ү. хянан зассан Япон хэл өөрөө сурах бичиг I , Монгол-Японы Найрамдлын Нийгэмлэг “САКУРА” сэтгүүлийн газар, Улаанбаатар хот 1991

(1993. 5. 11 受理)